あいおいニッセイ同和損保
ザ・フェニックスホール 情報誌

THE PHOENIX HALL

Salon

Vol.100 2016年1月 新春号

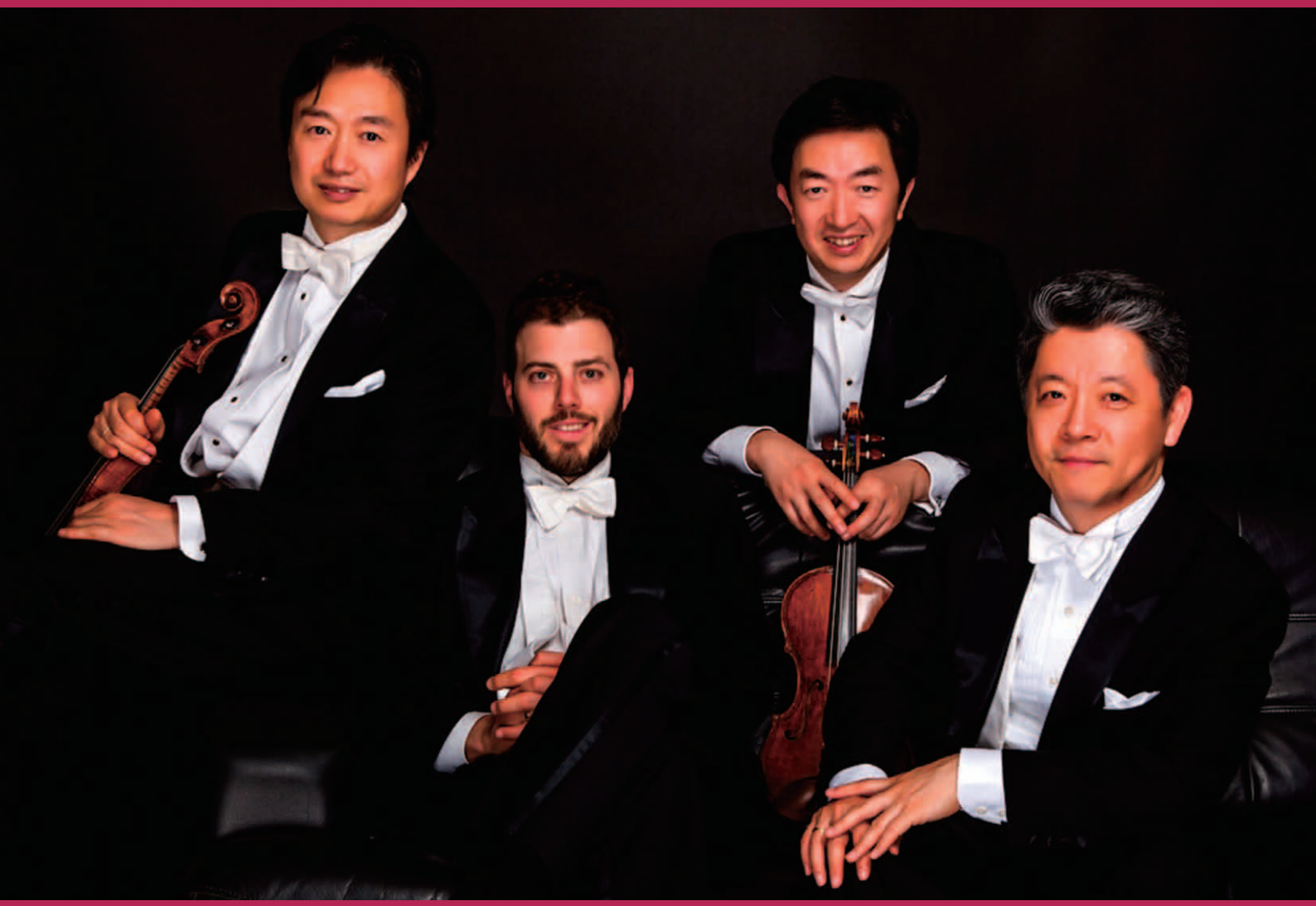
ホール2Fホワイエ壁画 ポール・ギアマン作「野外のヴァイオリニスト」

CONTENTS

01 Prime Interview —— 上海クァルテット
03 Phoenix Presents —— 上海クァルテット、イサン・エンダース、ファミリーコンサート
井上ハルカ サクソフォンリサイタル
06 Pick Up
07 Memories of 20 seasons —— メモリアルインタビュー 平田オリザ
11 Essay de say —— 12年後のカラス 松原 友

あいおいニッセイ同和損保

6月、主催公演に登場 ニューヨークを拠点に活躍する 結成33年目の名声高い弦楽四重奏団 上海クァルテット



「東洋と西洋。そして、過去と未来。その十字路に立つのが、上海クァルテットだ。ウェイガン(第1ヴァイオリン)とホンガン(ヴィオラ)のリ兄弟を中心に、結成から30年余り。イーウェン・ジャン(第2ヴァイオリン)、アメリカ出身のニコラス・ツァヴァラス(チェロ)と共に、傑出したアンサンブル能力と音楽性を武器に、世界的なトップ弦楽四重奏団へと登り詰めた。古典から新作初演まで幅広いレパートリーを手掛ける一方、そのルーツのひとつである中国の民謡の要素まで採り込み、西洋と東洋の音楽の要素を巧みに融合し、室内楽シーンに新たな地平を開拓。2015年11月、パリ同時多発テロ事件の発生直後に行ったザ・フェニックスホール公演で、「人々の心をひとつにし、深い痛みを癒す力を持つ音楽。我々には、それを担う使命がある」との強いメッセージ性を込めた、ベートーヴェンの名演を聴かせた。そして、名人集団は2016年初夏、ザ・フェニックスホールへ再び降臨。ベートーヴェンとバルトークを軸としたステージを通じ、混沌とした社会に向けて、音楽の底力を知らしめる。

(取材・文:寺西 肇／音楽ジャーナリスト)

「上海クァルテット」は、2016年6月11日(土)午後4時開演。入場料4,000円(指定席)、友の会3,600円。学生1,000円(限定数。ザ・フェニックスホールチケットセンターのみお取り扱い)。チケットのお求め、お問合わせは同センター(電話06-6363-7999　土・日・祝を除く平日10時〜17時)。
［プログラム］ブリッジ:3つのノヴェレッテ、バルトーク:弦楽四重奏曲 第1番 作品7 Sz40、ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 作品131

※プロフィールは3ページをご参照ください。

〈このインタビューを行ったのは、パリで起きた同時多発テロ事件から5日後のこと。音楽家と社会の関わりというテーマから、話は始まった〉
――このような状況の中、音楽家には何ができるのでしょうか。

イーウェン・ジャン(以下J)　このようなテロリズムやファシズムに対抗する“武器”は、確かに存在するはずですが、まさに人々は今、起きている事実を理解しようと努めている最中。だから、まだ軽々しくは述べるべきではないような気も…。

ホンガン・リ(以下HL)　2001年の9.11同時多発テロでビルが崩壊してしまった2週間後、ニューヨークのイーストサイド地区でコンサートがありま　した。その時、予定していたプログラムを変更して、バーバー「アダージョ」を演奏したんです。

ウェイガン・リ(以下WL)　聴衆は深い祈りの気持ちに満たされていました。それから何年も経ち

楽聖の名作、「再創造」期す

Shanghai Quartet

ましたが、どこで何を演奏しようとも、あの時と同じ気分を味わったことはないですね。いったんテロが起きれば、失われた日常は、決して戻っては来ない。一方で、我々音楽家は、異なる文化の架け橋となる責任があります。音楽こそが、その最も確実な手段です。単に美しい音楽を愛する、ということにとどまらず、他人を理解しようと努め、常に思いやりをかけるような、温かな想像力こそが大事なのです。でも、この問い自体は、解決することは決してない、深遠なものですね。

ニコラス・ツァヴァラス(以下T)　音楽は、世界中の誰もが話せる共通言語。この偉大な音楽が、世界中の誰もの心をひとつにする。今のように辛い時にこそ、周囲の人々に思いやりをかけ、音楽を信じて、“国際的な言葉”を話すべきなんです。

〈3つの作品を取り上げる予定の、6月のステージ。このインタビュー直前に行われた議論の結果、このうち、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第14番(作品131)と、バルトークの同第1番の上演がほぼ固まった〉

――いつも、こんな風に議論して、プログラミングするのですか。

WL　ほとんどの場合、長い議論を経て決まりますね。リハーサルの合間の休憩でも、その議論は続いています。プログラムを決めるまでには、とても長い時間を要します。それこそ、年がら年中、話し合っていると言ってもいいほどです。実際にリハーサルに取りかかるまでに、念入りに判断をしなければなりませんから。しかし、時に問題が複雑に入り組み、まるで難解なパズルのようにも…(笑)。

――皆さんが軸に据えている、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲とは。その演奏の上で心がけていることとは。

WL　彼の作品は、他の作曲家よりもどの作品よりも深遠で、洞察に富んでいます。ベートーヴェンは、壮大な人間愛へ身を捧げた人物でした。

J　ベートーヴェンを演奏する上で、まず心がけているのは、常に“再創造”すること。リハーサルのたびにもう一度、新たな気持ちで作品を“経験”し、私たち作品に込められた偉大なメッセージを受け止めて、それをステージで聴衆へと伝えるようにしています。

WL　そう。他のあらゆる音楽ジャンルを含めて、演奏家が成長することなしに、偉大な音楽を創造することはできないでしょう。もしも「これこそが正解だ」と言い切る音楽家がいたとしたら、彼はもっと経験を積むべきだ(笑)と思いますね。

J　そもそも、人間というのは常に成長を続けていて、新たな経験を重ねてゆく存在です。そう、まさに私にとっては、あのパリでの悲惨な出来事を知る前と知ってしまった後とでは、音楽に対する見方が変わってしまったように…。

――かたや、バルトークを対置する意図は?

WL　バルトークの弦楽四重奏曲第1番は、実はベートーヴェンの第14番とは直接の、大きな関連性があると、私たちは考えています。ベートーヴェンは全7楽章から成る壮大な音楽である一方、バルトークは単一楽章の作品ですが、音楽的な構造、特にクライマックスの形創り方などは、たいへん似通っています。どちらの作品も、悲しみを湛えた、ゆったりした楽想で開始され、クライマックスのハーモニーは平和で豊か、次の瞬間には静

けさがやって来て、そっけないような結末を迎える…。そう気づいてから何年か経って、実際に、バルトーク自身がベートーヴェンやモーツァルトのミニ・スコアを常にポケットに忍ばせ、折に触れて参照していたという事実を知りました。

T　この曲は、他のどの作品よりも深く、ベートーヴェンを再構築しているのだと理解していただけるはず。そこから分かるのは、バルトーク自身もまた、天才だったということです。

――ザ・フェニックスホールは、演奏空間としていかがですか。

WL　最近の日本のホールは、どこもいいですが、特に素晴らしい響きですね。

J　後ろにある反響板が上がって街が見えるのも、なかなかいい(笑)。

――音楽を創ってゆく上で、互いに喧嘩になってしまうような場面は?

HL　(4人揃って大笑いの後で、真顔になり…)私たちはお互い、とても率直です(この瞬間、他の3人が「そうだ」と口を揃えた)。ひとつの問題に関して「それでOK」なんて曖昧にやっていたら、余計にややこしくなって、時間もかかってしまう。

J　これが、まさに音楽創りだと私は思いますね。音楽的な提案を出し合い、そのことに関して、どれだけぶつかり合うかということ。これこそ、作品に対して、どれほどの真摯な強い思いを持っているか、ということに繋がるのですから。

T　そして、たとえ私個人が納得していないような状況であっても、本番ステージにおいては、4人が一体となって、ひとつの答えを導き、聴衆へと提示しなければなりません。

――ところで、皆さんはどうして、「弦楽四重奏」の道を志したのでしょうか。

WL　それが、自然だったから。学校で室内楽を学び、コンクールで幾つかの成功を経て、さらに学び、実際により高いレヴェルで音楽に接することができるようになり、さらに多くの喜びを得ることができました。そして今、ここでこうしていることが、私たちにとって、何よりも自然なんですよ。

――古典作品の一方、ペンデレツキら現代の一線作曲家への委嘱作品の初演に取り組むなど、レパートリーの拡大にも積極的ですね。中でも、中国人作曲家の作品が目立つのは、意識されてのことでしょうか。

WL　友人も多いので、電話して「新作を頼むよ」みたいな場面は、確かに多いかも(笑)。

――後進の指導にも取り組まれていますが、次世代のアンサンブルを、どうご覧になりますか。

T　基本的に、音楽性もテクニックも素晴らしい。ですが、特に日本の若いアンサンブルに言えるのは、技術的に完璧さを目指したり、慎重になり過ぎたりする部分があること。時に技術的にリスクを負ってでも、表現すべき場面があることをぜひ知ってほしい。

J　多分に国民性というのも、ありますからね。日本人はとても繊細で丁寧な一方、なかなか鷹揚さというのを受け容れられない。一方、アメリカ人などは自分の想いを何とか伝えようとして、時に粗野な手法をとってでも、創造性へと結びつけようとします。どちらが…とは言えないにせよ、ある意味、ステージは公衆へ自身の想いを伝える場だと言うのは、確かなことなのですから…。

――さて。上海クァルテットにとって、音楽的な「究極の目標」とは?

WL　うーん、それが「ない」ことかも(笑)。バルトークの全曲演奏に、中国でのブラームス・プロジェクト、続いてメンデルスゾーン、ドヴォルザーク、シューベルト…と、私たちにはただ、5年先に向けての計画があるだけです。

J　目標を定めて、そこへ行き着いたら、音楽の道が途絶えてしまいます。プロセスこそが、何よりも面白いし、重要なんです。

WL　そう。もしも作家が、素晴らしい本を出すと言う目標を立てたとして、それが叶ってしまったとしたら…後はもう、写真を撮るしかなくなってしまいますからね(笑)。

新年のご挨拶

みなさま　輝かしい新年を迎えられたことと存じます。昨年はあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールにご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。今年も当ホールにご来場されます全てのお客様にご満足いただけるホールとして、スタッフ一同、一層の努力をして参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。みなさまにとりまして、この一年が素晴らしい年になりますようご祈念申し上げますとともに、ご来館を心よりお待ちいたしております。

2016年　あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール　スタッフ一同

■アンサンブル・ア・ラ・カルト 59

2016年6月11日(土)

16:00開演　指定席
一般¥4,000(友の会価格¥3,600)
学生¥1,000(限定数)

出演
ウェイガン・リ、イーウェン・ジャン(以上ヴァイオリン)
ホンガン・リ(ヴィオラ)
ニコラス・ツァヴァラス(チェロ)

結成30年余。アジア発、世界のヒノキ舞台で称賛を浴びる、スーパーアンサンブル。
上海クァルテット

曲目　ブリッジ:3つのノヴェレッテ　　バルトーク:弦楽四重奏曲 第1番 作品7 Sz40
ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 作品131　(予定)

1983年、上海音楽院で結成。英ポーツマスのコンクールで入賞、注目を集めた。世界各地における国際音楽祭への出演や、名匠たちと共演を重ねる中で第一級の弦楽四重奏団としての名声を高めてきた。ベートーヴェンをはじめ古典から現代・同時代までの幅広いレパートリーを誇り、東洋と西洋の感性を併せ持った情熱的な演奏で知られる。96年の、ザ・フェニックスホールでの日本デビューから20年。成熟の合奏を「室内楽の殿堂」でお楽しみあれ。

上海クァルテット(Shanghai Quartet／弦楽四重奏団)
情熱的な音楽性、驚異的なテクニックと、多国籍的なイノベーションで知られる上海クァルテットは世界でも傑出したクァルテットとしての名声を不動のものとしてきた。
1983年上海音楽院で結成。85年ポーツマス(現:ロンドン)国際弦楽四重奏コンクール第2位。87年シカゴ新人コンペティションで優勝し、ニューヨークデビューを果たし本格的な演奏活動を開始する。
世界の主要音楽祭に招かれ、ヨーヨー・マ、ゲルハルト・オピッツ、ピーター・ゼルキン、今井信子、東京クァルテット、ジュリアード弦楽四重団、シャンテクリアなどと共演。1996年の初来日ではザ・フェニックスホールなどで公演を行い、以後来日を重ね2016年には日本デビュー20周年を迎える。
リリースしたCDは30タイトルを越す。特にカメラータ・トウキョウからのドヴォルザーク「アメリカ」は読売新聞紙上特選盤。続けてリリースしたベートーヴェン全7CDは、いずれもレコード芸術誌や特選盤、主要新聞で推薦盤として取り上げられた。
ニューヨークを拠点とし、ニュージャージーのモンクレア州立大学でレジデント・アンサンブルを務める。また上海交響楽団のアンサンブル・イン・レジデンスを務めるほか、母校、上海音楽院、北京中央音楽院の客員教授。

■注目アーティストシリーズ 64

2016年7月16日(土)

15:00開演　指定席
一般¥2,500(友の会価格¥2,250)
学生¥1,000(限定数)
※約3時間公演 休憩2回予定

出演
イサン・エンダース(チェロ)

欧州楽壇を照らし出す“彗星”チェリスト初登場。才能きらめく、全6曲一挙公演。
今井信子presents
“彗星” イサン・エンダース —バッハ「無伴奏チェロ組曲」

曲目　J・S・バッハ:無伴奏チェロ組曲　第1番 ト長調 BWV1007　第2番 ニ短調 BWV1008
第3番 ハ長調 BWV1009　第4番 変ホ長調 BWV1010
第5番 ハ短調 BWV1011　第6番 ニ長調 BWV1012　(予定)

欧州の名門楽団「ドレスデン・シュターツカペレ」首席奏者に弱冠20歳で就任。ソリストに転身後はウィーン楽友協会やライプツィヒ・ゲヴァントハウス、ラインガウ音楽祭などでオーケストラと共演、リサイタルで聴衆のハートを揺さぶり、「室内楽の聖地」とも言われる米マルボロ音楽祭でもきらめく才能で重鎮たちの注目を集めた。今回は「チェロの聖典」とされるバッハ作品全6曲を一日で演奏。生気と歌謡性に満ちた斬新なアプローチを披露する。

©Taeuk Kang

イサン・エンダース(Isang Enders／チェロ)　1988年生まれ。20歳でドレスデン歌劇場管首席チェリストに就任、ドイツ最年少の首席奏者となった。同楽団に4年間在籍した後、ソロ活動に集中するため、退団。以後世界各地でデビューを重ね、成功を収めている。2012年にはズービン・メータの指揮でドヴォルザーク音楽祭に、ブラームスの二重協奏曲でウィーン楽友協会に、14年にはエリアフ・インバル指揮でソウル・フィルにデビュー。15年にはフランス放送フィルハーモニー管との共演で「パリの秋」音楽祭に出演した。これまでにクリストフ・エッシェンバッハ、チョン・ミュンフン、パブロ・ヘラス=カサドらの指揮でドレスデン歌劇場管、ベルリン放送響、シュトゥットガルト・フィルハーモニー管などと共演。今後はフィルハーモニア管との初共演、ソウル・フィルとのデュティユー「チェロ協奏曲」の韓国初演、スロヴェニア放送響とのシューマン「チェロ協奏曲」、「ハイデルベルクの春」音楽祭出演などが予定されている。使用楽器は、1840年製のジャン=バティスト・ヴィヨーム。これまでにベルリン・クラシックス、SONYミュージック・エンタテインメント・コリアからCDをリリースしている。

1月22日(金)
10:00 受付開始
ザ・フェニックスホール
友の会優先予約

1月25日(月)
10:00 受付開始
イー・フェニックス
E-PHX優先予約

1月26日(火)
10:00
一般発売

インターネット予約、ご来店による
お申込みは1月27日(水)10:00から!

■ファミリーコンサートシリーズ 3

2016年7月27日(水)

15:00開演　指定席
一般¥2,000(友の会価格¥1,800)
学生¥1,000
※学生券は5才以上対象。

出演
宮本妥子、後藤ゆり子
(以上マリンバ、パーカッション)
伊沢磨紀(朗読)

スプーンも楽器に!?音楽物語と贈る、ドキドキ・ワクワクの体感ステージ。

宮本妥子&後藤ゆり子
親子で楽しむ「パーカッションde大冒険！」

曲目　ハチャトゥリアン:「ガイーヌ」より 剣の舞　　メンケ:小さな机の音楽
ライヒ:マリンバ・フェイズ　　ピアソラ:リベルタンゴ　ほか(予定)

全国各地で活躍する打楽器奏者、宮本妥子・後藤ゆり子が登場。マリンバとよばれる“木琴”をメーンに楽器の原点から知り、スプーンも楽器にするなど、打楽器音楽の魅力を体感する驚きと発見のコンサート。また、一滴の「水」が世界中を旅して繰り広げる大冒険のお話を、朗読と音楽と併せてお届けします。

宮本妥子(みやもと・やすこ／マリンバ、パーカッション)　同志社女子大学卒業後、ドイツ国立フライブルク音楽大学ソリスト科で首席最優秀の成績でドイツ国家演奏家資格(konzertexamen)取得。1995年ルクセンブルク国際マリンバコンクールほか数々の国際コンクールで入賞、優勝。滋賀県文化奨励賞、平和堂財団芸術奨励賞を受賞。世界10カ国以上の現代音楽祭でソリストとして招待演奏するなど、欧米各地で高い評価を得る。帰国後、(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業協力アーティストとして、全国各地で多数のアウトリーチやコンサートに出演している。現在、石山高校音楽科、相愛大学非常勤講師、同志社女子大学嘱託講師。パール&アダムス・モニター・アーティスト。http://www.yasukomiyamoto.com/

後藤ゆり子(ごとう・ゆりこ／マリンバ、パーカッション)　同志社女子大学音楽科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。在学中第10回日本管打楽器コンクールで第3位受賞。作曲、編曲も手がけ数々の作品を発表する。また、「夢と希望と笑い！」のあるコンサート創りを目指し、マリンバアンサンブル ‘MAR’(ま～る)を結成。音楽の可能性と楽しさを追求し、落語、口笛、バンジョー、演歌など様々なコラボレーションでも全国各地で演奏活動を行う。後藤ゆり子ミュージックランドを主宰し、後進の育成に取り組む。CDアルバム「クワイエット・グリーン」「MAR TONE」「embrace」をリリース。

伊沢磨紀(いざわ・まき／朗読)　東京都出身。1985年劇団青い鳥入団。以降、同劇団上演作品に出演するほか、客演も数多い。“子供のためのシェイクスピア” シリーズに出演を重ね、高評を得ている。主な出演作品は「青い実をたべた」「銀の実時間」「天使たちの誘惑」(劇団青い鳥)、高泉淳子・伊沢磨紀ふたり芝居「モンタージュ」(共作高泉淳子)、「嘘は罪」(大人計画プロデュース)、「三人姉妹」(世田谷パブリックシアター)、「ワーニャ伯父さん」(華のん企画)など。テレビドラマ、ナレーション、映画でも活躍中。

ホール主催・協賛公演チケットのお申込み方法

06-6363-7999
土・日・祝日を除く平日の10:00～17:00

■ザ・フェニックスホール友の会優先予約
- ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
- 主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
- 友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

■E-PHX(イー・フェニックス)優先予約
- E-PHX(イー・フェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
- 事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

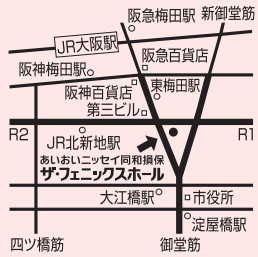
■一般発売
- 一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
- チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

http://phoenixhall.jp/
チケットセンターのページからお申込みください

■インターネット予約 (主催公演のみ)
- ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
- チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
- ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
- 学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
- チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

直接のご来店による お申込み

- ザ・フェニックスホールチケットセンターはホール建物5階、エレベーターを降りて廊下右手です。



チケットお申込み後のお受け渡し方法
下記①または②のどちらかとなります。

①お申込み日から10日以内にザ・フェニックスホールチケットセンターへご来店ください。
営業時間は土・日・祝日を除く平日の10:00～17:00です。

②先に郵便振込みをしていただき、入金確認後チケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座　00940-0-95351　　加入者名　ザ・フェニックスホール

Phoenix OSAQA 2016

弦楽四重奏公開マスタークラス＆受講生による修了コンサート聴講受付開始

未来のJSQをあなたの耳で感じてください！

「Phoenix OSAQA（Open String Academy for Quartet Artists 弦楽四重奏を志す若者のための自由塾）」は、国内トップ級のソリストでつくる実力派弦楽四重奏団「ジャパン・ストリング・クヮルテット（JSQ）」を講師に迎え、公募、審査で選ばれた若手の弦楽四重奏団を指導・育成、室内楽ファンの拡大ももも図る教育・啓発事業を本年度も2016年3月に行います。また、このマスタークラスでは、レッスンの模様を間近に見て感じていただけます。その後、指導を受けた弦楽四重奏団による「修了コンサート」では、講師の指導で成長を目指す彼らの姿を、どうか見守ってください。皆様のお申込みをお待ちしています。

ジャパン・ストリング・クヮルテット コンサート　発売中

■日時　2016年3月18日（金）　14:00開演／13:30開場
■入場料　¥4,000（友の会価格¥3,600）　指定席
　学生券 ¥1,000（限定数・電話予約可・当ホールのみの取扱）
■曲目　モーツァルト：弦楽四重奏曲第14番 ト長調 K387、ヴェーベルン：5つの楽章 作品5、ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 作品132（予定）

■受付
2016年1月22日（金）10:00から受付開始

■講師
ジャパン・ストリング・クヮルテット
久保陽子（第1ヴァイオリン）　久合田緑（第2ヴァイオリン）
菅沼準二（ヴィオラ）　岩崎 洸（チェロ）

■公開マスタークラス
2016年3月19日（土）・20日（日・祝）
両日とも11:00開始（10:30開場）
入場料：無料（お一人4枚まで）
※要入場券、当ホールチケットセンターのみ取扱

■修了コンサート
2016年3月21日（月・振休）
15:00開演（14:30開場）
出演／公開マスタークラス受講生
入場料：500円（自由席）
（友の会割引なし。当ホールチケットセンターのみのお取り扱い）

修了コンサート 有料になりました

＊出演者、スケジュール、演奏曲目など内容の詳細は、ホームページなどで紹介します。
＊スペシャルトーク付　3/21（月・振休）15:00〜16:00（予定）
　渡辺 和（音楽ジャーナリスト）
　ベートーヴェンの弦楽四重奏曲について

■会場 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

■お申し込み・お問い合わせ
あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
電話　06-6363-7999（土・日・祝を除く平日10:00〜17:00）
FAX　06-6363-1124
e-mail　concert@phoenixhall.jp

■フェニックス・エヴォリューションシリーズ77　　主催　井上ハルカリサイタル実行委員会

2016年7月6日（水）

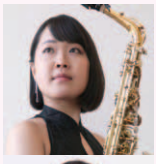
19:00開演　自由席
一般前売¥3,000
（友の会価格¥2,700）
一般当日¥3,500
（友の会価格¥3,150）
学生前売¥2,500
学生当日¥3,000
※学生券は高校生以下対象。

出演
井上ハルカ（サクソフォン）
戸田 恵（ピアノ）
有馬純寿（エレクトロニクス）

井上ハルカ サクソフォンリサイタル ～影と光の対話～

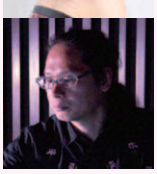
曲目　ドビュッシー：ラプソディー　デュクリュック：ソナタ 嬰ハ調　高 昌帥：ぬばたまの…
田中カレン：ナイト・バード　スウィンバンク：something golden in the night（真夜中に金色に光るもの）[日本初演]
ブーレーズ：二重の影の対話

フランス近代音楽を代表する作曲家ドビュッシーから、昨年生誕90周年を迎えフランスの現代音楽界を今もなお牽引し続ける知の巨匠ブーレーズ、そして現在活躍している若手精鋭作曲家まで、今回は比較的新しい時代の作品を取り上げます。現代音楽…うるさくて聴くのが難しそう、そう思っていませんか？今回のリサイタルのプログラムは、そういった方達が、現代音楽ってちょっと面白いかも！と思っていただけるような演出に挑戦します。確かに特殊奏法で不快な音が鳴ったり、聴くのに予備知識が必要な作品もあります。今回は特殊奏法も多くなく、予備知識がなくても楽しんでいただけるよう、キーワードとして「影と光の対話」という副題を付けました。物理現象としての影と光だけでなく、人間の内面的な影と光、影の世界の神秘、儚さ、妖しさなどを表現できるよう、音響・照明を使用し、想像力をかき立てられる空間を、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールに作り出します。



井上ハルカ（いのうえ・はるか／サクソフォン）　2015年パリ国立高等音楽院を修了後、日本に帰国し、関西を中心に演奏活動を行う。若手の作曲家達による新作の初演も多数手がける傍ら、IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)をはじめとする、ヨーロッパ各地での様々なプロジェクトやフェスティヴァル、世界サクソフォン会議などのイベントに参加。ブーローニュ・ビヤンクール現代音楽コンクールで審査員特別賞を受賞。ヤマハ音楽振興会、フランス・メイヤー財団、並びにADAMI財団奨学生。

戸田 恵（とだ・めぐみ／ピアノ）　パリ国立高等音楽院、パリ・エコール・ノルマル音楽院、名古屋芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了。第10回シャトゥー国際ピアノコンクール第2位、併せて日仏友好賞の受賞をはじめ、国内外の数々のコンクールに入賞。ソリストとして、ウクライナ国立交響楽団、ブルガリア国立ソフィアフィル交響楽団、セントラル愛知交響楽団・中部フィルハーモニー交響楽団合同オーケストラと共演。現在は大阪、名古屋を中心に演奏活動と後進の指導を行う。



有馬純寿（ありま・すみひさ／エレクトロニクス）　エレクトロニクスやコンピュータを用いた音響表現を中心に、現代音楽、即興演奏などジャンルを横断する活動を展開。ソリストや室内アンサンブルのメンバーとして多くの国内外の現代音楽祭に参加し、300を超える作品の音響技術や演奏を手がけ、高い評価を得ている。平成24年度第63回芸術選奨文部科学大臣新人賞芸術振興部門を受賞。2012年より現代音楽アンサンブル「東京現音計画」をスタート、その第1回公演が第13回佐治敬三賞を受賞。

フェニックス・エヴォリューション・シリーズは、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社の芸術文化支援活動の一つです。同社が運営するあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール（大阪・梅田）での公演企画を公募、審査で選ばれた方にホールと付帯設備を無料で貸与致します。

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。
当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛公演

《冬のチェンバロ音楽祭2016/冬のチェンバロの会20周年記念公演》

主催　冬のチェンバロの会

トビリシ弦楽四重奏団

発売中

2016年2月1日(月)　19:00開演　自由席
一般前売¥3,500(友の会価格¥3,150)　当日¥4,000(友の会割引なし)　25歳以下&大学院生以下前売・当日¥2,500　※友の会割引は1会員2枚まで。

出演
ギオルギ・バブアゼ、チプリアン・マリネスク(以上ヴァイオリン)
ザザ・ゴグア(ヴィオラ)、林 裕(チェロ)

曲目
ベートーヴェン：弦楽四重奏のための「大フーガ」変ロ長調 作品133
シューベルト：弦楽四重奏曲 第13番 イ短調「ロザムンデ」作品29 D804
ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲 第8番 ハ短調 作品110
アザラシヴィリ：弦楽四重奏のための「祖国ジョージアの情景」より5つの小品
ツィンツァゼ：弦楽四重奏のための5つの細密画(ミニアチュール)

初めての「冬のチェンバロ ――大江光の音楽と上條恒彦のうた――」以来、冬のチェンバロの会と名づけて、毎年冬にコンサートを企画して今年で20年。続けてこられたのは、まずすばらしい音楽家の協力があったこと。また「“冬のチェンバロ”さんの活動のおかげで私達の震災後の生活が潤いのあるものに成りました事にいつも感謝しております。どうぞ出来るだけ永く続けてと心からねがっています」といった温かい励ましと支えのおかげです。これからも音楽の喜びをより多くの人たちと共感したいと願って今しばし歩み続けます。

協賛公演

関西二期会サロンオペラ 第12回公演「椿姫」

主催　公益社団法人関西二期会

発売中

2016年2月16日(火)、17日(水)　19:00開演　自由席　一般前売・当日¥3,000(友の会価格¥2,700)

出演　松浦修(指揮)、木川田直聡(演出)、
蜷川千佳(ピアノ)、西垣俊朗(公演監督)

●キャスト(16日)　松浦優、諏訪部匡司、山咲響、王由紀、岩本実奈子、
鈴木信一、黒田まさき、谷本尚隆、大西信太郎
●キャスト(17日)　北野加織、瀬田雅巳、吉田昌樹、岸畑真由子、塩出律、
中川智樹、黒田まさき、谷本尚隆、大西信太郎

曲目　ヴェルディ(F・M・ピアーヴェ台本)：歌劇「椿姫」

毎回ご好評を頂いております関西二期会サロンオペラ。気軽にプロの演奏を楽しんで頂くことをテーマに公演を重ねてきました。第12回公演は数あるオペラ作品の中でも特に人気の高い「椿姫」です。ヴェルディの繊細かつ華麗な音楽により繰り広げられる、高級娼婦と純朴な青年とのあまりにも有名なこの悲劇の物語を、歌手の息遣いまで感じられるザ・フェニックスホールの空間でお楽しみください。

協賛公演

荘村清志&福田進一 デュオ・コンサート

主催　おおの音楽事務所

1/15(金)発売

2016年4月2日(土)　14:00開演　指定席　一般前売・当日¥4,800(友の会価格¥4,300)

出演　荘村清志、福田進一(以上ギター)

曲目　ソル：ランクラージュマン 作品34
ファリャ：「はかなき人生」より“スペイン舞曲”
グラナドス：「スペイン舞曲集」より“オリエンタル”
マイヤース：カヴァティーナ　ほか

イエペスに認められ、学んだスペイン音楽をルーツとしながら武満徹などの現代作品をも意欲的に取り上げてきた荘村清志と、パリ・エコール・ノルマル音楽院に学び、バッハから現代まで驚異的なレパートリーでギターの新地平を開拓し続けてきた福田進一。ギター界をけん引してきた両巨匠が夢の共演。珠玉の名品と心おどる演奏をお楽しみください。

写真提供：日本コロムビア

協賛公演

オーギュスタン・デュメイ&関西フィルハーモニー管弦楽団 スプリング・スペシャルコンサート

主催　(特)関西フィルハーモニー管弦楽団

発売中

2016年5月11日(水)　19:00開演　指定席　一般前売・当日¥4,000(友の会価格¥3,600)　学生(25歳以下)前売・当日¥2,000

出演　オーギュスタン・デュメイ(指揮・ヴァイオリン)
関西フィルハーモニー管弦楽団

曲目　モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K516
(ヴァイオリン：デュメイほか、関西フィルメンバー)
チャイコフスキー：弦楽セレナーデ ハ長調 作品48
(指揮：デュメイ)

大阪の街中の“音の聖域”で、音楽監督デュメイ&関西フィルの魅力を体感していただくスプリング・スペシャルコンサート！
関西フィルのメンバーたちとともに、デュメイが存在感満点のヴァイオリンで奏でるモーツァルトと、チャイコフスキー「弦楽セレナーデ」をお贈りいたします。あなたの眼の前の親密な空間で奏でられる、極上のアンサンブルを存分にご堪能ください。これぞ室内楽ホールならではの醍醐味！

©HIKAWA

劇場・音楽ホールの活性化図る「劇場法」制定を推進した劇作家・演出家 平田オリザさん

「劇場法」という法律が出来て、3年半になる。劇場や文化ホールなど音楽や演劇、ダンスなどの実演芸術を上演する施設の役割を定め、社会的な位置付けを確かなものにすることなどを狙いに2012年、整備された。劇作家・演出家として内外で活躍する平田オリザさんは、民主党・鳩山政権の時代に内閣官房参与に登用され、この法律の制定を推進したキーパーソン。東京で小劇場を経営し、座付きの劇団を主宰。さまざまな大学で演劇を講じ、また演劇を活用しコミュニケーション能力向上を促すワークショップを全国の学校や企業などで続けてもいる。文化施設の芸術監督を務めるなど、演劇の力を自ら体現・実践する「マルチ演劇人」だ。コンサートホールを含むこれからの「劇場」の在るべき姿は―。多忙な平田さんに話を聴いた。

（あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール 谷本裕）

演劇人というと、時の権力に対し批判的というイメージを私は持っていました。時の政権へのご協力は不思議な気がしました。

演劇人が政治的立場を明らかにして行動するのは、ヨーロッパではよくあることです。日本は不幸にも第2次世界大戦後、長い間、政権交代がありませんでした。少し厳しい言い方をするなら、アーティスト、とりわけ演劇人は「反体制」であれば居心地が良かった。言い換えれば、現実的な政策提言はしてこなかった。政権交代があれば自分たちが与党側に立つ可能性もある。普段から現実的な政策を構想し、時の与党と妥協したり、交渉して法律や予算をつくったりする方が自然ではないでしょうか。状況と共に自分も変わる感覚がない方が問題です。文化に関わる法律が出来るのは、10年に一度のチャンス。私は以前から「劇場法」の必要性を主張してきた。そのチャンスが出たときに、臆して身を引くのはだらしないことと思いました。内閣官房参与という役職は、首相のスピーチを書く役目。私のなけなしの文才を認めてくれたのなら、それを「質草」に劇場法をつくる、と腹を括りました。

民間ホールも対象

この法律は、国公立の施設を対象にしているんでしょうか。

規定しやすいのは公の施設ですが、理念としては官民問わず、劇場というものを制度的に位置付けたい。その思いがありました。図書館には図書館法が、美術館には博物館法があります。しかし、日本の場合、劇場は単に鑑賞の場として捉えられている。美術館や図書館は展示や貸し出しのほか、収蔵や収集、研究や記録など、様々な文化振興の役割を担っている。劇場にはそうした意識は無い。それを裏付ける法律もなかった。法律がなければ、劇場は公的認知を得ているとは言えません。法律というものは、私たちの権利を守ってくれる場合もあれば、制御することもある。守ってくれる法律をつくっておくことが大事と考えました。

条文には、劇場が自ら芸術文化を「発信・創造」することが定められています。劇場を取り巻く関係者は、最初から賛成しましたか。

難しかったですね。今もその面はあります。日本の劇場の多くは（施設を外部に貸す）貸し館事業を軸としています。このため、館を「管理・運営する」立場が相当強い。自前で公演を「創造」する機能は弱い。劇場法で定めようとした発信・創造機能

ひらた・おりざ　1962年東京生まれ。国際基督教大学在学中に劇団「青年団」を結成、現在も主宰。こまばアゴラ劇場を拠点に内外で活動。現代口語演劇理論を確立し、1995年、『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。2003年、『その河をこえて、五月』で第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。フランスを中心に世界各国で作品が上演・出版されている。著書に『芸術立国論』（AICT評論家賞受賞）、『演劇のことば』、『わかりあえないことから』、『新しい広場をつくる』ほか。初の小説『幕が上がる』が2015年映画化された。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス国文化省から芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。東京藝術大学COI研究推進機構特任教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター客員教授。（公財）舞台芸術財団演劇人会議理事長、埼玉県富士見市民文化会館キラリ☆ふじみマネージャー、日本劇作家協会副会長、日本演劇学会理事、（財）地域創造理事、豊岡市文化政策担当参与。

「発信・創造」で地域貢献を

は、簡単に果たせそうにない。だから反対する。こんな例が多かった。以前、新国立劇場が開館する際も、「民業圧迫」といった反対が強かった。自分たちの日常の現実に捕らわれてしまい、広い視野で「劇場の公共性」を語る声が多くはなかった。そんなことではいつまで経っても、芸術家が文化政策の主導権を握ることはできません。

理想と現実のギャップですね。

制定過程の最後に、公共ホールの関係者から「国際交流に関わる記述を外してくれ」と言われたのも象徴的でした。音楽やダンスとは異なり、演劇では海外と共同で企画や制作に取り組む際、作品でどの言葉を用いるか、翻訳はどうするか、しばしば問題になります。「法律で定められると国際的な交流事業もやらなくてはいけない。出来ないと国の助成金が出なくなるのでないか」。こういった疑心暗鬼が広がった。また民間事業者には「貸し館だけでは不利になる」という疑念が強まったこともありました。法的整備と、現場で実演芸術に携わる人々の意識改革は車の両輪です。

「創る」施設を経営

なぜ「劇場はモノを生み出さなくてはならない」と、考えたのですか。

それは私自身が若い時から、特殊な立場に居た事と関係しています。学生の頃、父が自宅を劇場に改築しました。私は23歳でそこを継ぎました。一億円を超す借金があり、返済のため当初は、貸し館を主軸にしました。でも、自分は本来、劇作家として作品を生む立場。「劇場経営は単なる不動産業ではない」と考えるようになりました。作家の立場で、劇を創る施設として経営し、関係者や観衆から信頼を得てきた。

「専門家」が施設のトップに立つ意義を、ご著書でも強調されています。

学校や病院には「貸し教室」や「貸し病室」は、まずありません。病院は医療、学校は教育の内容に、医師や教師が責任を持ち、施設を経営していきます。公共性の高い施設はつまり、自らがサービスの質を担保し、地域に貢献するものなのです。劇場も同じように、地域の芸術文化活動に責任を持たなければなりません。創造的な事業をいろいろ試み、実績を積んで「地域に欠かせない」と市民に認めてもらう。大切なことです。

法には劇場が取り組む事業として、「普及」や「教育」事業なども盛り込まれています。

そうした事業は、入場料を払ってくれる方以外の市民にも、訴える力があります。私はもちろん、芸術文化そのものの力ー心を慰めたり、勇気付けたりする力ーを信じています。でも残念ながらそれは、すべての人に理解していただいている訳でない。或るお芝居や或る曲がたとえ百年、二百年と上演され続けてきたとしても、町の人すべてを幸せにできるとは限らない。現実に公のカネを使う以上は当然、他の事業で、目に見える貢献もしていかなければ社会に対する説得力は弱くなってしまう。アイデアで多彩な事業を試みなければ。

平田さんのワークショップも、同じ思いで取り組んでおられるのかもしれません。普及・教育事業の意義を、周囲の演劇人は理解してくれましたか。

最初は「俺たち、何をしているんだろ」と戸惑いもあったようです。あまり気にしませんでした。私自身は高校演劇の指導を通し、これは必ず社会に広がると確信していました。ただワークショップをやっている時は、自分でも「家で脚本を書いてた方が良いんじゃないか」と思うこともあります。劇作家は百年先を見据えた仕事をするもの。ワークショップで携わる演出家としての仕事は、限られた時間で成果を挙げなくてはならない。理想と現実、その両方を併せ持つことで、活動のバランスを取ってきたのかなと思います。

劇場法の、最終的な狙いは何でしょう。

「劇場文化」を日本に根差させることです。今、日本では有名な演出家や俳優、指揮者・ソリストを舞台に招けば、お客は集まります。でもヨーロッパでは、市民は劇場の芸術監督を信頼し、彼らが編成する事業を年間通して見たり、聴いたりしてくれる。これが「劇場文化」です。劇場法の施行後に出来た劇場やホールの多くは、この法にのっとった施設を目指すようになり、日本も徐々に変わりつつあります。以前は、公立ホールに役所から出向してきた年配のスタッフに、「芸術のことは分かりませんで…」などと挨拶をされ、怒ったものです。でも今のスタッフ、特に30歳以下の世代は大学で芸術経営を学んだり、海外経験があったりで、劇場の能力は上がっています。でも、事業の方向を定める芸術監督制はまだ遅れています。

―なぜ。

「芸術家は何をするか分からない」という懸念が周囲にあります。芸術家の側にも一因はあります。例えば、自分の考えを人々に明確に伝えられる言語能力が足りない。また、経営実践の機会が少ないのも大きいと思います。ヨーロッパ、特にフランスの劇場では、優れた演出家は早ければ20歳代後半で芸術監督に登用される。日本円で5千万から2億もの規模の事業予算を任される。それをすべて自己作品の発表に充てる「勇気」を持つ人は少ない。代わりに、古典演劇のレパートリーとか、アウトリーチ活動などを一生懸命勉強するんです。その中で「演劇の公共性」を身に付ける。でも日本では、芸術監督や音楽監督になるのは年を取ってから。その頃には個人的なコネ、しがらみが出来てしまっており、事業の選択が限られてしまいがち。若い時期にこそ、公の立場を経験させることが必要です。その中できっと、人生を懸けて劇場を守る人材に成長してくれる―。そう願っているんです。あと20年くらい、かかるかもしれませんが。

将来は、充実した発信・創造事業を手掛ける「創造型」の劇場やホールと、その成果を受け取る「観る劇場」の二種類に、全国の館を大別する。著書などで、そう仰っています。

現実にキチンとした年間事業計画を立てられる創造型の劇場の数は、全国で30、多くても各都道府県に一つずつ、50程度で良いのではないか、というのが僕の考え。音楽ホールも同じようなものでしょう。「主軸」の数を絞ることで各地の設置・運営者、あるいは現場の奮起を促したいのです。

どこに「愛」向ける

劇場をはじめ、芸術文化に携わる人に必要なことは―。

芸術への「愛」が有るのは当然として、その「対象」をハッキリさせることでしょうか。例えば、この地域の人に、どんな演劇を見せたいか、音楽を聴かせたいかを考える。そういう人は地域の公共ホールの制作者になる。或る俳優や音楽家を活かすため、共演者や出演舞台を考える人もいていい。あるいは、大きく音楽や演劇の素晴らしさを知ってもらうために、今、どの作曲家とどの指揮者、どの演奏家で公演をつくるか考える…。貧しい人に向けた事業、100年先を見据えた作品つくりに携わるのも良いでしょう。それらをバランスよく組み合わせるのもあって良い。ただ、何となく楽しいので、仕事をやっているというだけでは、プロとはいえません。対象の定まった、強い愛を持つ。それが大切だと思うのです。

協力：兵庫県立尼崎青少年創造劇場
〈ピッコロシアター〉

劇場法　正式名は「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」。我が国初の劇場・コンサートホールなどの管理法。超党派の国会議員が構成する「音楽議員連盟」の議員立法として第180回国会に上程され、成立、2012年6月に公布、制定された。国立、公立と民間の劇場などが対象。前文と16条の本則から成る。劇場や音楽堂、文化ホールなどの定義、行われるべき事業や、事業に必要な人材養成・確保などを定めている。劇場などの事業として（1）実演芸術の公演の企画・実施（2）実演芸術の公演・発表を行う者の利用に供する（3）実演芸術に関する普及啓発（4）他の劇場など関係機関などと連携した取り組み（5）実演芸術にかかわる国際交流（6）実演芸術に関する調査研究や、資料収集や情報提供（7）これら事業に必要な人材の育成（8）地域社会の絆の維持や強化を図り、共生社会の実現に役立つ事業の実施ーを規定。鑑賞者育成のための教育・啓発や、学校教育との連携も求めている。劇場などを建築物としての物的施設と、運営に携わる人的組織との総合体（営造物）として捉え、施設の活性化を通し、音楽・舞踊・演劇・伝統芸能・演芸といった実演芸術の振興を図る点が特徴とされる。

参考文献：根木昭・佐藤良子著『公共ホールと劇場・音楽堂法 文化政策の法的基盤Ⅱ』2013年 水曜社

Homage

未来の才能を発掘・育成する「場」としての役割をさらに

児嶋一江

東京藝術大学・同大学院を経て、国際ロータリー財団奨学生として国立ミュンヘン音楽大学留学、同マスターコース修了。日本音楽コンクール・ジュネーブ国際音楽コンクール入賞。全ドイツ音楽コンクール優勝。ヨーロッパ・日本国内でリサイタル、オーケストラとの協演、また、著名なソリスト達との共演では圧倒的な音楽的信頼を寄せられ、ソロ・アンサンブルで幅広い活躍を続けている。多くのコンクール審査の他、公開講座なども積極的に行っている。相愛大学音楽学部教授。

1995年、大阪に開館した「ザ・フェニックスホール」の名前を聞き、その後1998年に私は初めて演奏する機会(室内楽)を頂きました。

当日まずホール内に入った瞬間に「何と居心地のよい空間だろう！」と感じ、共演者達がステージで音を出しているのを客席で聴きながら、距離感を感じない豊かな響きに驚きました。実際に自分でピアノを弾いた時には「本当に、こんなに客席と舞台での響きの感覚が同じなんて、あり得るのだろうか？」と不思議に思いました。ヨーロッパのホールをはじめ様々なホールを経験してきた私ですが、300席規模のホールで、こういった感覚は正直驚きでした。ホールの奥行きと天井高のバランスが、大きな一つの部屋の様に一体となって作用しているからでしょうか。ステージから客席を見ると、お客様がとても近くで聴いて下さっている感覚を持ちます。また、客席からは演奏家の息遣いや良い意味での楽器の様々な雑音まで美しく響いて聴こえてきます。300席の贅沢な室内楽ホールの面目躍如といった感じでしょうか。演奏会内容によりステージの高さを選択出来、ホール内空間容積の変更が出来るのも素晴らしいことです。アンコール演奏中に初めてステージ後方の遮光壁がゆっくりと音も無く上がっていった時は、思わず美しい夜景に目を奪われました。

その後、私自身何度も演奏させて頂きましたが、20年近くの間で特に印象深かった演奏会本番を二つだけ挙げるとしたら、2005年「ザ・フェニックスホール10周年記念チャリティーコンサート」Vn.樫本大進さんとのデュオ(J.S.Bach、W.A.Mozart、J.Brahmsのソナタ)と、2014年ホール主催：Vn.キム・スーヤンさんとのJ.Brahmsのソナタ全曲演奏会です。お二人とも当時まだ20歳代で、限りない可能性を感じる彼らの瑞々しい感性とエネルギーから、私自身が大きな感銘を受け、忘れられない演奏会本番になっています。2005年は、10周年記念ということでホワイエやステージは豪華なフラワーアレンジメントで飾られていたわけですが、このお花の設えが尋常でなく（これほど凄いのはその後も見たことがありません）、空間を圧倒していたことをいまも鮮明に覚えています。大進さんの演奏は、お花たちの華やかさにシンクロするように、プログラム選曲からも窺われる通り非常に真摯なものでした。また、2014年キム・スーヤンさんの大らかで繊細で探究心に富んだ素晴らしいJ.Brahmsでの共演も強烈な印象を持っています。このお二人が、今現在は既に最も実力ある若手ヴァイオリニストとして世界中に名前を馳せていることは、皆様ご存知だと思います。ホール主催事業で、こういった若くて才能に溢れた演奏者をプロデュースする様々な意欲的なコンサートを提供し続けて下さるのは、演奏家にとっても聴衆にとっても大変貴重で有り難いことだと私は考えています。

そしてもうひとつ。ザ・フェニックスホールを会場として、ホール開館当時から「全日本学生音楽コンクール大阪大会」(毎日新聞社主催・NHK後援)が毎年開催されています。このコンクールは今年第70回を迎える歴史の長いコンクールで、「演奏家への成長を目指す若者のチャレンジの場」最難関のひとつです。私も子供の頃から何度もチャレンジしてきました。大阪大会には4部門の予選に毎年500人近くが参加をし、大阪大会本選・全国大会と進みます。私はピアノ部門審査員としてほぼ毎年、ホール2階席に座り予選・本選の演奏を聴きながら若いチャレンジャー達に心からの声援を送っています。この学生コンクールから巣立った優秀な若者達が、立派な演奏家と成長して再びザ・フェニックスホールに戻って来て、今度はリサイタルなどを開催することも多い様です。彼らにとっては特別な思い入れがあり、演奏家として夢実現への憧れのホールとなっています。

若い才能を発掘・育成する、という観点から提案です。ザ・フェニックスホールは世界でも稀にみる素晴らしい室内楽ホールですから、この場所で新たなアンサンブル・グループが発掘・育成される、というのはそれ自体、とても価値があることだと考えます。例えば、ホール主催のオーディション、コンクールなどを行い、優秀で意欲的なアンサンブル・グループ(2人以上)を選抜し、ある一定の期間(1~2年)に数回の演奏会機会を提供してホールと聴衆が一緒に応援をし、演奏家達を育てるというプログラム実施はいかがでしょうか？息の長い良いアンサンブル・グループの育成は難しいことだと思うのですが、私は音楽の大きな楽しみは室内楽にあると思うので、このホールがその様な機会を提供して下さり、常にアンサンブルに接する演奏家と聴衆が益々増えると素晴らしいのではないかと考えます。

さて、昔は貴族のサロンで様々な集まりがあり芸術を味わい楽しみました。そこでの会話や飲食は、芸術に付随したものとして人々の興味を大いに駆り立てていたことでしょう。それは現代であっても変わらず、演奏会会場とその後のお食事の場は、人々の「社交」の場として、素敵な機能を持ち続けていると感じています。ザ・フェニックスホールの界隈には、元々、西側には古くからの由緒ある「北新地」がありますが、最近では北側の「お初天神」界隈に新しい横町(「裏参道」というそうです)ができてかなり盛り上がっていますし、梅田駅の北側が再開発されたりと、「演奏会後の集い」の選択肢がぐっと増えました。私自身、演奏会後に外国人を含む共演者達とこの界隈のお店にご一緒することが数多くあり、皆さん例外なく、特に最近、大阪「キタ」の雰囲気をとても喜んでいます。演奏家にとっては、演奏会本番の後に「何処で」「何を」いただこうかと考えるのは大きな楽しみのひとつです。そして今日の演奏を反省して、新たな発想を得て、明日の活力を養うのです！お客様にとっては、音楽の余韻と共に楽しい会話と食事の時間を持つことで、演奏にインスパイアされて新しい発想が生まれたり、「次は何を聴きに来ようかな」などと素敵な計画が立てられたりするのではないでしょうか？

（こじま・かずえ＝ピアニスト）

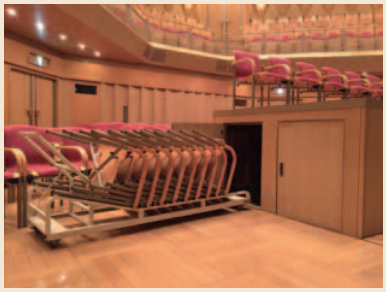
Gallery

『秘密の収納庫』

フェニックスホールの舞台はいくつかのブロックに分かれ、各々が昇降出来ることを、ご存知の方も多いと思います。アンサンブルの編成や楽器の個性に応じ、広さや高さ、さらには舞台の設定位置も変えられるのが特長です。

もう一つの特長は、1階客席のイスが床に固定されておらず、舞台の設定位置に合わせて、客席の配置も自在に変えられる点です。

ところで、公演によってイスを並べたり、並べなかったりする舞台上手・下手のLA～LD、RA～RD座席。そのイスたちは普段どこに収納されているのか？　実は、客席中央部の床下なのです。そのブロックに、隠された収納庫が作りつけられ、1階客席の全てのイスが収納できます。しかし、イスの全く無い状態では通常の演奏会は開催できません。収納庫をフル活用することはまずありません。唯一の例外が、年に1回のホール床ワックスがけ。イスが一つもない、静まり返ったホールを見つめていると、前夜の音楽家の熱演、お客様の喝采と歓声がまるで幻のように脳裏に甦ってくるのです。



Venues for Chamber Music

室内楽ホールを紹介するシリーズ第４回。名古屋で、いずれも高い発信力を持つ２つの施設、「ザ・コンサートホール」と「宗次ホール」にご登場願いました。

ザ コンサートホール 名古屋・伏見・電気文化会館

設置者：中部電力株式会社
所在地：名古屋市中区栄2-2-5 B2
電話：052-204-1133　座席数：395席

こんにちは！室内楽ホール ⑥名古屋編

「音楽の愉しみ」「同時代のヴァイオリニストたち」「ピアニスト・ピアニズム」などのシリーズを持つ。これまでに、ロシアのアレクサンドル・メルニコフを起用し、公演時間が3時間にも及ぶショスタコーヴィチ「24の前奏曲とフーガ」を取り上げたほか、ロシアの新鋭ヴァイオリニスト、アリーナ・イブラギモヴァによるベートーヴェンのソナタ全曲チクルスを開くなどで、とりわけコアなファンの人気を集めている。

みぎた・けいこ　名古屋市生まれ。短大卒業時、いったん中部電力を志すが、同社が文化事業に乗り出すことを知り方向転換、株式会社電気文化会館（現・中電不動産株式会社）入り。ホール開設以来、主催事業の制作、貸し館事業担当、機関紙製作をはじめ広報業務などに携わってきた。現在、小中学生の子育て真っ最中。

「集客リスク」恐れぬ企画も

中電不動産株式会社 文化事業室副課長 右田恵子さん

当ホールは1986年、名古屋の伏見に建設された「電気文化会館」の中にあります。ここは元々、日本初の石炭火力発電所が設けられた電力事業発祥の地。会館は、中部電力の創立35周年を記念して計画され、でんきの科学館やギャラリーを併設した複合文化施設です。

音楽ホールとしては、ベガ・ホール（宝塚）や中新田バッハホール（宮城県加美町）と共に第1世代に属し、民間のサントリーホールやカザルスホール（東京）に先んじた開設。当時、名古屋には多目的ホールしかありません。企業の芸術文化支援活動として、地味な室内楽に特化した音楽専用ホールを志したのは、英断といえるかもしれません。ホール内装はイタリア産の白大理石。豊かな響きが特徴で、特にギターやチェンバロ、弦楽器に適しています。

開設記念事業の後、ホール主催公演は暫く年3、4回程度に留め、地域の音楽家と共催公演に取り組んでいました。その後、運営会社の改編などを機に、開設20年にあたる2006年頃から新たな理念を掲げ、主催事業の活性化を図ってきました。「海外の名手を紹介する」と、「国内若手を発掘し、舞台を提供する」の二本柱。数も５倍程に増やしました。

都心に立地し、交通の便に恵まれ、岐阜、四日市、豊田、岡崎など近郊の都市からのアクセスも良い。外部主催者による貸し館の数がすぐ増え、今も年間稼働率は90％以上です。でも当時の文化事業部長（味岡幹三氏）はこうした顧客や聴衆、演奏家に一層、「館のステイタス」を感じてもらい、地域に貢献するには主催事業を通じた「個性づくり」が必要と考えたのでした。幸い、会員数が3倍増するなど評価頂き、今日に至っています。名古屋には、官民ともに新たな音楽ホールが開設され、新しい「顔」つくりが課題であり続けています。

私は今春、企画担当を命じられ、周囲に支えられながら模索しています。芸術性は高いけれどあまり演奏されない曲や、〝ブレイク〟前の俊英を、集客のリスクを抱えても起用するなど、時に冒険に挑んできた路線を引き継ぎつつ、声楽に注力するなど新機軸を打ち出せたら良いと考えています。

宗次ホール Munetsugu Hall

設置者：宗次徳二氏
所在地：名古屋市中区栄4-5-14
電話：052-265-1715　座席数310席

こんにちは！室内楽ホール ⑦名古屋編

スタッフの創意を活用した独自の経営手法が特徴。広報にホールファンを活用したボランティア組織「チラシ広め隊」は代表格。地域の音楽家、企業、博物館・映画館と連携する事業を矢継ぎ早に打ち出している。若手支援に積極的でヴァイオリンや弦楽四重奏のコンクールを開催するほか、2015年11月にはサラサーテ作曲のヴァイオリンの名作演奏を競う「ツィゴイネルワイゼンコンクール」を創設。

にしの・ひろゆき　1980年富山県生まれ、愛知県瀬戸市で育つ。中学・高校時代は吹奏楽部でユーフォニアムを演奏。上京し、上智大でドイツ文学を、のち早大で東洋哲学を専攻する傍ら、故・村方千之氏の私塾で指揮法を学んでもいた。2007年に宗次ホール入り。企画・制作担当スタッフを経て、2009年から現職。

主催公演、驚異の年400回　宗次ホール副支配人 西野裕之さん

全国チェーンのカレーレストラン「CoCo壱番屋」創業者の宗次徳二が私費で建設しました。創設理念は、演奏家に良い発表の場を提供する。クラシック音楽の素晴らしさを普及・拡大する。この2点です。これをミッションに、地域密着の運営を心掛けています。

ホールの事業は館自身が企画・制作する主催公演と、他主催者が営む貸し館公演に分かれます。私たちも当初、貸し館を行っていましたが、2014年から主催に絞りました。その数、年間約400回。ほぼ毎日、公演が連なり、一日2公演も珍しくありません。客席300のホールで、これほど主催公演を開いているのは私たちだけ。どの公演も多くのお客様をお迎えできるよう努めています。

舞台に起用するのはまず、地元の優れた音楽家の方。聴きやすい内容でプログラムを組んでもらい、券売も一定数、受け持って頂く。これが「ランチタイム名曲コンサート」。午前11時半から1時間。価格も千円とお手頃です。近所のレストランと提携し、公演後の飲食共々、楽しんでもらう。多くのお客様には最初は「食事会にコンサートも付いている」感じ。出演者には「次回は音楽を主軸に来て下さるよう、充実の舞台を」と〝奮起〟をお願いします。

より本格的な公演に位置付けているのが「スイーツタイム」コンサート。東京や海外の、実力は十分だけれど知名度はこれからという気鋭を起用したり、文化講座的内容も交えたり。こちらも午後1時半開演の1時間半。繰り返しおいでいただけるよう、料金は2千円に設定しています。聴衆は主婦層と高齢者が多いです。夜公演より客足が伸びる。今ではこうした昼間公演が、全体の8割を占めます。

無名のアーティストにも好奇心を持って下さるよう、PRの際はよくよく考えます。若手起用の際は「ちょっとした〝賭け〟ですが、ぜひ」とお誘いすることも。音楽は自分で聴いて確かめないと分からない。定番だけでなく、新しい演奏家も寛容に聴いて下さるよう働きかけるのです。「うまくいかなくても、挑戦を大切に」。オーナーの哲学を踏まえ、試みを続けていきます。

12年後のカラス

—松原 友

好きな動物はネコ。母が動物好きで初めは近所で拾ったのだが、何となく増え続けて実家では多い時に5匹のネコがいた。その愛くるしさから、外でネコを見かけるとつい近寄ってしまう。大半のネコは人見知りをしてすぐに逃げてしまうが、たまにニャーと鳴いてすり寄ってくれる時はとても嬉しい。周りのことは何も気にせず、いつもマイペースで、気の向くままに生きて、どこか女性的。大阪人だからかいつもせっかちで、A型だからか細かいことばかり気にしている私にない部分を、ネコは持ち合わせているから好きなのだろう。

苦手な動物はカラス。以前自転車に乗っていた時にふいに後ろから襲われたことがあったし、信号待ちをしていた時に、頭の上にフンを載せられたこともあった。少しでもカラスが見えたら、わざわざ避けて遠回りする。何よりもあのガラガラとした鳴き声が苦手。でも悔しいことに発声がいいのか、遠くにいても良く響く声を聴くと、声楽的には学ぶところもある。私は黒い服は好んで着るほうだし、もしかしたらカラスの中に何となく自分と似ている部分を見出して敬遠しているのかもしれない。

シューベルトが晩年にミュラーの24の詩に作曲した連作歌曲集「冬の旅」の15曲目に「カラス」という曲がある。ハ短調の物悲しい響きの中に、切なく美しい旋律を伴う。

— カラスが私と一緒に街からついてきた 今日までずっと私の頭上を飛んでいる カラス、不思議な動物よ 私から去りたくないのか？ すぐにでも私の身体を餌食にして狙おうと思っているのか もうそんなに長くない 旅の杖にすがることも カラス、今こそ私にみせておくれ 墓場までの忠実ぶりを —

私はこの曲を歌う時、いつも思い出す光景がある。ミュンヘンに留学中の1月1日、その年の年末年始は雪に覆われて寒かった。友人の家で年越しのパーティーに招かれ、朝になって家に帰った。街を歩く人は誰もなく、雪が全ての音を吸収して本当に静かだった。アパートの前に着いたとき、私の目の前でドサッと音がした。木から雪が落ちたのだろうと思ったら、凍死したハトが上から落ちてきたのだった。あまりの寒さに私の身体はかじかみ、埋めてやるにも雪が降り積もっていたので、可哀想に思いながらその場を立ち去ろうとした時、背後でバサバサッと音がした。カラスだった。長い雪のため餌にありつけず、瀕死の状態のハトを狙い、息絶えるのを待っていたのだろう。私はしばらく呆然と立ち尽くしてその光景を眺めていた。寒さから我に返った時にようやくカラスを追い払った。

「冬の旅」全曲を初めて歌ったのは5年前の1月、ザ・フェニックスホールだった。当時私は31歳。シューベルトが「冬の旅」を作曲したのも晩年の31歳だった。小林道夫先生の弾く第1曲目の八分音符で刻む前奏は、まさしく雪が降り続ける冬の光景がホールに広がっていた。今の私の目標は12年後の2028年、シューベルトの没後200周年に、自分の中で最高の「冬の旅」を歌うこと。その時に再びザ・フェニックスホールで歌えるよう、努力を重ねたい。

松原 友(まつばら・とも)／テノール歌手

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学卒業。第51回全国学生音楽コンクール全国大会第1位。第14回松方音楽賞、第81回、第83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞受賞。これまでミュンヘン放送管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団等のオーケストラと共演。NHKリサイタルノヴァ、ルール・トリエンナーレ、サイトウ・キネン・フェスティバル、PMF音楽祭に出演。同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪府立夕陽丘高校各非常勤講師。二期会会員。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー5F TEL 06-6363-0211

Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月　2016年1月
発　　行　あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
編　　集　吉元 晃
デザイン　松井桂三有限会社